

高次脳機能障がい部会 報告書

会議名	第2回 高次脳機能障がい部会		
開催日時	令和6年12月14日(土) 13時30分～16時40分		
開催場所	板橋区役所 南館6階 教育支援センター研修室ABC、オンライン (Zoom)		
出席者数	47名 (うち、オンライン参加者4名)	傍聴者数	—

第1部 講演

テーマ	都内の他自治体の高次脳機能障がい者の支援に学ぶ -西東京市の実践から-
概要	<p>■ 講師：特定非営利活動法人ミモザ 理事長 山本 弓彦 氏</p> <p>■ 講演概要：①特定非営利活動法人ミモザについて ②保谷障害者福祉センターについて ③パツソ西東京・富士町作業所について ④グループホームコデマリハウスとライラックについて ⑤地域で、楽しく、安心して暮らしていくために</p>
主な 質疑応答	<p>○家族がいたり、ルールのある生活に抵抗がある方もいると思うが、社会生活をしていた方は、どのような起点でグループホームへ入所しているのか。 →自立訓練 (HiBDy 東京) を終了して入所する方が半数ほど。服薬管理や生活習慣がもとから崩れていた方は、家族のもとへ戻らず、グループホームへ継続して入所している。</p> <p>○自立するということは、どのようなことだと考えているか。また、自立を支えるためには、地域で何が必要だと考えるか。 →高次脳機能障がいだと考えると、自立は、自分で決められることであると考えている。支援者は隣にいて、結果を決めるのは全てご自身、というのが良い。地域に必要なことは、当事者の方が力をつけられるようにサポートすることであると考えている。</p>

第2部 交流会

概要	<p>■ 各当事者団体の紹介</p> <p>①板橋失語症 虹の会 ②板橋区失語症若者の会 スイスイの会 ③中途障害者と家族の会 のびるの会 ④いたばし高次脳機能障がい家族会 ⑤高次脳機能障害さいたま これからの道</p> <p>■ グループでの情報交換会 (本日の感想、情報交換 等)</p>
グループ数	8グループ (うち1つが Zoom グループ)
発表内容	<p>■ 1班 (Zoom グループ)</p> <p>○講師の方の「自分で決める」ということが、そもそも難しい方にはどう考えれば良いかというお話があり、依存先を増やすということも自立なのではとの意見があった。 ○社会資源が増えたり、社会が変わったりするためには、当事者とそのご家族が、家族会を超えて、社会に発信することが重要とお話があった。</p> <p>■ 2班</p> <p>○当事者の方の障がいとなられた体験談、その時の気持ち、ご家族の方の障がい受容のお話を伺い、非常に良かった。今は皆さん、新たな目標を見つけるなど前向きに頑張っているお姿を会話の中で見ることができ、非常に有意義な時間であった。</p>

発表内容

■ 3班

○コロナ禍で家にいることが慣れてしまったのではないかという推測で、コロナ禍以降、このような場への新規参加者が減っているという話題があがった。また、日本は申請主義のため、このような場があることを、病院のスタッフ含め地域全体で知っておくことや、活用できる福祉サービスがあることも知っておくことが必要。

○高次脳機能障がい児が埋もれているとの意見があった。ご家族の判断により埋もれていることもあるため、周囲の人が知識を持つことで、周囲が気づいてあげられる社会づくりが必要。

■ 4班

○福祉サービスについて、それぞれ障がいや事情が異なるため、わからないことがあれば行政に聞いてほしいとのことで頼もしく感じた。

○福祉現場では支援の経験が非常に重要であるため、福祉職側も当事者やご家族の方から相談を受け、自身で経験を積み重ねていくことが大事。

■ 5班

○当事者、ご家族の方のお話で、調べものをしたり様々なところに参加したりすることで、少しずつできることが増えたり、やりたいことが見つかったりと、新たなステージに進むことができるのだと、勉強になる時間だった。

○病院で働く者として、当事者やご家族へ情報を早めにお伝えし、退院時に少しでも不安をへらせるよう、努力していかなければならない

■ 6班

○ご家族の方の経験談から、板橋区ではまだまだ社社会資源が足りていないことや区の障がい者福祉センターの状況、区の制度、急性期や回復期といった病院の役割などをメインで話した。

■ 7班

○当事者の方への支援に関わることで、支援する側のスキルアップなどに繋がる。

○病院退院後、就労のステージに進む際、就労に向けた準備が不十分であったり、環境が問題となったりで、引きこもりになるケースがある。またすぐやり直せるよう、また、支援ルートに再度乗れるよう、継続して相談できる体制ができると良い。

■ 8班

○祖母、母、当事者であるお子さんのお話を伺った。3人がそれぞれ一対一で向かい合うのではなく、お互いが共に支え合いながらこれまで過ごしてきたとのこと。家族の力の偉大さを感じた。

○東京都心身障害者福祉センターに3か月入所後、地域に戻ってきたとのこと。地域に戻ってからが長く、区立障がい者福祉センターに相談しながら暮らしており、地域に戻ってからの支援が大切ということについて、お話を伺い改めて実感した。

会議名	第3回 高次脳機能障がい部会		
開催日時	令和7年2月18日(火) 18時20分～20時30分		
開催場所	板橋区役所 南館6階 教育支援センター研修室ABC、オンライン (Zoom)		
出席者数	41名 (うち、オンライン参加者3名)	傍聴者数	—

第1部 事例紹介

テーマ	社会的行動障がいのある高次脳機能障がい者の支援
概要	<ul style="list-style-type: none"> ■ 事例紹介 <ul style="list-style-type: none"> ・ 事例紹介 障がい者福祉センター 原田 氏 ■ 様々な支援機関や団体から社会的行動障がいと事例に関する説明 <ul style="list-style-type: none"> ・ 医学的見地から 豊島病院 中島 医師 ・ ADLの見地から 竹川病院 高橋 氏 ・ 福祉リハの見地から 障がい者福祉センター 山口 氏 ・ 家族会、当事者から 中途障がいをもつ人のデイサービスをつくろう会 本山 代表

第2部 グループ検討

概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事例についての検討 ・ グループによる発表 ・ 総評 豊島病院 中島 医師、高次脳機能障がい部会 會田 部会長
グループ数	5グループ (うち1つがZoomグループ)
発表内容	<ul style="list-style-type: none"> ■ 1班 <ul style="list-style-type: none"> ○ 月曜から金曜までスケジュールが詰め込みすぎなのではないかという意見があった。また、易怒性や失語症により人間関係がうまくいっていない点について話が合った。 ○ 本人の隠れたニーズを引き出し、それを支援者が汲み取ることの大切さや、不機嫌となる要因、人間関係の悪化を一つ一つ解決していくためにはコミュニケーションが非常に重要であることについて意見があった。 ■ 2班 <ul style="list-style-type: none"> ○ 今回の事例は、最初から就労に向けた支援の側面が強く、その時々段階で目標を立てるのが良いのではないかという意見があった。 ○ 支援のステップとして、第一段階は、安心して生活できる基盤づくりが必要であること。第二段階は、本人の易怒性を考慮した、集団(社会)の中で自身の障がい(苦手分野)を認識してもらうこと。第三段階は、第二段階の認識を経たうえで、相談窓口を確立すること。第四段階は、自立した生活を送ること。 ■ 3班 <ul style="list-style-type: none"> ○ ADさんに対し、板橋区ではどのような地域資源が活用できるかという視点を持って話し合った。 ○ 易怒性には必ず原因があり、ストレスなどの些細な体調不良により症状が悪化してしまうため体調管理が非常に大切であること、本人の興味関心のある分野を支援に取り入れることは重要であることなどの意見が出た。

発表内容	<p>○現在の生活状況に少し余裕を持たせ体調管理を行い、そば屋に勤めていた経験を地域活動支援センターで生かし、失語症会話パートナーによりコミュニケーションを図ることといったことが話し合われた。</p> <p>■ 4班</p> <p>○ADさんの課題である「易怒性、固執性が強い、独善的な処罰感情が強い、人間関係が悪化し、サービス利用に支障が生じている」という点に着目して話し合った。</p> <p>○易怒性が強い方とうまく付き合っていくためには、まず、なぜその方が怒ってしまうのかという原因を探り、知っていくことが大切という話が出た。そして、その方が落ち着いて生活できる環境を整えてあげることも大切。また、その方の趣味を共通点に心を開いてもらうこと、本当の真意を伝えるために紙に書いて伝えるということが重要であるとの意見があった。</p> <p>■ 5班 (Zoom グループ)</p> <p>○本人の真のニーズが見えないケース。そういう場合は、事例に要に福祉サービスをぎっしりと埋められてしまいがちになる。それにより自分を見失い、リハビリをひたすら頑張っているのかもしれないという意見があった。また、安心して気を許せる場や和める場がなさそうなことから、本人が真のニーズを伝えられる状況に無かったのではないか。</p> <p>○失語症の会や会話パートナーといった支援者、ピアの方々と繋がることで、リハビリ依存ではなく「こういう生き方がいいな」というところに繋がれば良い、本人のニーズをきちんと汲み取れるよう、支援者間の会議やヒアリングを丁寧に行い、ミスマッチかもしれないサービスを見直していく必要があるという意見があった。</p> <p>○訪問看護がケアマネや医療と連携することで、日頃の生活の様子を細かく情報共有でき、より本人が望む支援に繋がるのではないかとこの意見があった。</p>
------	---